高岡市男女平等推進プラン情報誌
11　号　2002年3月

ありーて

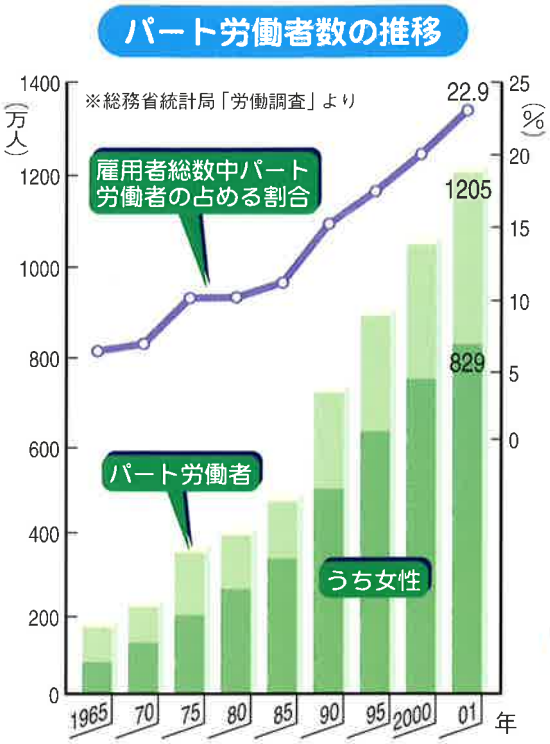
もくじ

私らしい働き方　パートを選ぶ女性達
キーワードは、ワークシェアリング？
セピア色の写真から
高岡って甘いの？ しょっぱいの？
こんにちは　女性行政室です

「ありーて」は、自分の力で問題解決していくイギリスの童話「アリーテ姫の冒険」の主人公の名前です。
「私の未来は私が創る」とアリーテはいいます。

私らしい働き方

パートを選ぶ女性達



総務省の労働力調査（2001年）によると、週労働時間35時間以内のパートで働く女性は829万人。

富山県の場合は、女性雇用者に占める比率は全国に比べて少ないとはいえ、人数・比率とも増加傾向にあり、労働力としての重要な位置を占めています。

実際にパートで働く方達は、自分の仕事をどう位置づけているのでしょうか。何人かの方に意見を聞いてみました。

私は短大を卒業してからずっとフルタイムで働いてきましたが、事情があって2年前からパートタイムに切り替えました。本当は正社員でと思っていたのですが、年齢的なこともあり、なかなか良い就職口が見つかりませんでした。しかし、1＋1＝2だと割り切って、今はパートを2つ掛け持ちで働いています。年収は少し減りましたが、生活にも気持ちにも余裕ができ、いろいろな活動にも参加できるようになり、今の働き方に満足しています。もちろん夫の収入があるからですが。

しかし、今とフルタイムで一日中拘束されてサービス残業までしていた頃と比較して、月収はほぼ変わらず、ボーナス分のみ減少というのは、まったく納得のいかない話だと思います。何となくフルタイムじゃなければ一人前の働き方とは言えないと、変にとらわれていたと思いますし、自己実現の場は仕事とは限らないと、目からうろこが落ちたような感じです。今後どうなるかは分かりませんが、しばらくは現状を維持したいと思っています。

パートという就労形態を選択したのは、他の多くの方々と同じように家事との両立が理由である。

私達核家族にとっては、子どもがいる場合、フルタイムで働くことは非常に困難である。近くに、いざという時に子どもの面倒を見てくれる人がいない限り、ほとんど不可能と言ってもいいと思う。

私の場合、もう子どもが手のかからない年（中1・小4）になったのでフルタイムで働けないこともないと思うが、この就労形態を変えようとは思わない。これ以上の精神的または肉体的負担を、自分自身に課したくないからである。もちろん就労によって、自分の自由になるお金と、家族以外の社会を持てるというメリットを得ているわけで、それが就労の理由で

40歳半ばを過ぎての就職ということもあって、職種を選べる立場ではなかった。仕事を探すのに第一に考えたことは、自分のライフスタイルを崩さず、無理なく働ける場所であり、その次は勿論時給である。自分に自信が無いのも手伝って、短くてもいいから時給の高い職場を探して勤め始めた。就職するときのタイミングというか職場との相性もあるような気がする。今現在の職場は、パートとはいえ、労働条件も良く、すっかり仕事にもなじめ、早4年が過ぎた。若い人たちに混じって働き、そのパワーをもらい、かつ自分のライフスタイルも崩さない、今の働き方に大いに満足している。

最近の不況の中、職を求めてたくさんの人が就職活動をしている。こんな時代だからこそ職場はパート労働を大いに歓迎し、働き手は仕事を分け合うことで、互いに折り合いが取れるのではないだろうか。仕事より家族を大切にする人達が増えてきた今の時代に、自分のライフスタイルに合った働き方が出来るパート労働は、贅沢な働き方かもしれない。

この不況の中、パートサテライトには毎日沢山の求職者が足を運んでいます。しかし、自分の思い通りの仕事は、なかなか見つかりません。そんな中、私の場合自分の持っている資格を生かす仕事に就くことが出来ました。

核家族で転勤族、そして子どもが小学生ということもあり、労働時間等の限られた条件の中、小学校低学年の多人数学級に伴う非常勤補助教師というパートです。雇用の条件には、教職員資格は関係ないのですが、少なからず資格の影響も有ったかなと思っています。

子育てが一段落した後、何らかの資格を取得する人がいます。しかし、私の場合は、一時的なパートではあったものの稀なケースであったかも知れません。なぜなら、その他にも資格を取得してはいますが、その後なかなか資格の生かせる職場が見あたらないのが現状だからです。

小学生の子どもに負担をかけない時間帯となると、どうしても9時～15時までが労働時間帯となってしまいます。また、4月からは学校も土・日曜が完全休日となることも重なり、益々パートにも就けなくなってしまいます。

私の周りにも沢山の同じ思いの友達がいることを考えると、求人される企業の方々にもう少し労働時間帯を工夫してもらえれば、ありがたいです。

もある。夫はサラリーマンであり、毎日帰宅するのが平均で午後11時過ぎという状態のため、子どもの学校の行事等や、地域の割り振られた仕事等、もちろん家事労働の分担も、全く望めない。夫にもパートに出るにあたって、私が働くことは反対しないが、協力も出来ないと言われている。夫は出張も多いので現状では仕方がない。

性別・家族形態にかかわらず、いろんな就労形態を自分自身で選択でき得る社会になったらいいと思うが、そのためには、学童保育や病院内保育、男性が家事や育児に参加可能な会社内での意識改革（現在の有給休暇さえ取れない、全ての規定が絵に描いた餅の状態）等々、クリアしなければならない課題が多すぎる。

意見をいただいた方達は、家庭やその他の活動と仕事の両立を、それぞれの立場でこなして暮らしています。

一般にパート労働は、低賃金で身分は不安定、フルタイムへの転換も困難と多くの問題を抱えています。それにもかかわらず、パートという働き方を選ぶ理由は、「仕事以外の時間を大切にしたい」という思いからのようです。裏を返せば、正社員として就職すると、私的な時間を削られているということになります。

また、日本の完全失業率は5・3％（平成14年1月季節調整値）まで上がって、過去最高を記録し続けています。企業のリストラ等で失業者が増える一方で、残業続きで休日も取れない人達もいるというのが現状です。

※「ありーて」10号第一次発送分の一部で“これって男女平等？”の中で、農協の女性個人正組合員0人となっていましたが、現在一割弱の女性組合員の方がおられます。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

イラスト：越野誠子

キーワードは ワークシェアリング？

女性達がパートを選ぶ理由は様々ですが、現在の生き方に不満は無いように見えます。でも、これまでに少なくとも一度は何らかの理由で離職を余儀なくされ、再就職するには、パートしか選択肢が無かったという現実があります。

また、少子化が加速する理由の一つに、フルタイムで働いた上に家事・育児も100%負うことはとても無理と考える若者が増えていることもあります。

未来を担う子ども達を育てるという大事業を、女性だけに押しつけた効率中心の働き方を、再考する時期にきているのではないでしょうか。

'97年国民生活白書の中で、働く女性を主題に分析しています

現在のような日本的雇用慣行、特に年功賃金体系の下では、出産・育児等により就職を中断することは多大な金銭的損失をもたらします。その損失額の大きさを短大卒相当の女性を例に試算してみると、

フルタイムで、約 6,300万円の損失

継続して勤務した場合との賃金格差	約 3,900万円
退職金の差額	約 500万円
出産・育児による就業中断中の賃金	約 1,900万円

パートで、1億8,500万円の損失が生じます。

パートタイマーの年収を100万円と仮定し試算すると、

就業中断時の賃金 ＋ 復職後の賃金格差 ＋ 就業中断・再就職の場合との賃金格差 ＋ 退職金の差額（1度目の退職時に支給される65万円のみとする）

＝就業を継続した場合と比べて約１億8,500円の損失

※試算に用いた女性は、20歳時に就職。結婚後27歳で第1子を出産し、31歳で第2子を出産する。一時退職する場合には27歳で第1子出産と同時に退職し、第2子が満１歳の時に再就職するものとしている。

労働省「賃金構造基本統計調査」（1995、96年）

こんなに損をしているのに、退職しなければならないなんて…

男性の家事時間は、70年・95年とも26分間で、25年間全く変化がみられない。女性の社会進出は進みつつあり、現実に家事と仕事で二重の負担が生じている。

役割分担の意識改革の難しさに、女性達のため息が聞こえてきそうです。

国際的には高学歴になるほど仕事に就く割合が高くなる傾向にあるが、日本の高学歴女性の場合、一度離職すると、再就職する女性が少ない。

人材を生かさないなんて、社会にとっても損失です。

公的年金制度は、稼ぎ手としての夫、主婦としての妻、そして子供といった昔ながらの家族モデルに基づいて構成されている。

税金や年金の取り扱いを巡って、「103万円の壁」や「130万円の壁」が良く話題にあがります。これは妻＝被扶養者という社会システム上の制度であり、女性の経済的自立を阻害する壁となると同時に、パートタイマーの労働条件を低くする要因ともいわれています。

どの項目を切り取っても、結婚後も働き続けたい女性にはマイナス要素ばかりです。子育てを機に離職して、賃金が低くてもパートで再就職・・・という選択肢しか残されていません。実状は、家事・育児・介護等の無償労働大部分を一人で担った上でのパート労働です。

そんな中で、「ワークシェアリング」という考え方が注目を集めています。一人あたりの労働時間を短くして、その代わり大勢の人が仕事に就けるようにしようというものです。

目的別に分けると、

1.緊急避難型　2.雇用創出型
3.多様な就業対応型　4.高年齢者対応型

の4類型になります。

ヨーロッパ各国が日本より先に取り組んでいますが、「3.多様な就業対応型」に分類される、オランダで導入されている〈パートタイム正社員制度〉が注目されています。

※オランダ型ワークシェアリング

労働時間の長さによって、待遇が変わらないことが特徴です。(83年に12%だった失業率が、2000年には2.6%に下がった) 週2日だけのパートタイムであっても、時間給にすれば、同じ仕事をしている週5日のフルタイムの人と同じ条件、年金・保険などの社会保障も同一条件にするのです。待遇に差がなければ、育児や介護に時間をかけたいから週2日だけ働くという選択ができます。パートナーにも週3日労働にしてもらえば、二人の収入の合計は5日間フルタイムで働くのと同じになるわけです。

実現すれば、こんな働き方が可能に・・・

定年退職をしたが、まだまだ働く意欲も、力もある。自由な時間を楽しんで、余った時間を生かしたい。

子どもが小さい間は、
僕も子育てに参加したい。

ただ、ワークシェアリングも万能ではなく、いくつかの問題点を抱えています。

- 一人あたりの賃金が減少する
- 企業側のコストが増える（人材育成・社会保障等）
- 仕事に対する責任の所在が不明朗
- 仕事への意欲が持続するか　　等々・・・

これらにどう対処していくかが今後の課題といえそうです。

一人ひとりの生活スタイルに合った、柔軟な働き方が選べる社会を実現するためのシステムは、失業率の上昇もあって、国家レベルでも研究され始めています。また、女性が働きやすい環境は、高齢者にとっても働きやすく、これからの超高齢社会への対応策にもなると思われます。

これが日本の社会に定着していくには、男女の役割分担の意識や、企業の社会的貢献の考え等、今までの慣習を根本から変えていく必要があります。

ちょっと立ち止まって、本当の豊かさとは何か、何のために働いているのか、自分に問いかけてみて下さい。大切なことが見えてくるかもしれません。

セピア色の写真から

鰕目（えのめ）とみさん

（鰕目とみさん／後列中央）

「私は今年、年女なのよ」と背筋を伸ばし、歯切れよくお話をされるとみさんは、大正七年二月生まれ、現役の看護婦長の役職を担っておられます。お訪ねして、そのパワーの源を伺いました。

父の言葉

とみさんが子供の頃、弟さんが陸上選手として疾走競技に出場しました。完走した直後、頭痛を訴え意識が無くなり、家族の看護もむなしく帰らぬ人となりました。急性脳膜炎でした。

そのとき、父の「家族に誰か看護婦がいてくれればこんなことにならなかったかも」と言う言葉がとみさんの心に深く残りました。「それからは、ただその言葉が忘れられなくて迷わず看護婦になったんですよ」と話されました。

とみさんは、高岡産業組合病院（現在の厚生連高岡病院）に勤務され、看護婦人生が始まります。

当時の採用試験は、学力より身体検査の重視で、背丈の高いことが採用条件だったそうです。

資格を活かして

昭和十六年二月に結婚、病院を退職し、富山県衛生課に勤務。仕事に必要な資格は必ず取得し、それを活かして働くとみさんの姿は、まさに仲間の模範的な存在でした。「資格を持っていることが、心強く働くバネになりました。数少ない資格者は重要な人材でしたね」とその当時を語られるとみさんにパワーを感じました。

当時は戦時中、男性のほとんどが出征し、女性職員が留守の職場を守りました。「おかげでとんとん昇進し、通勤手当に二等車分が支給されとても助かりました。待遇もとてもよかった」と当時を振り返りながら笑顔で話されました。

戦後、家庭に入ったとみさんは、家事、育児のかたわら衛生管理者として、夫の会社を助ける毎日でした。

そして、突然夫の会社が倒産、人生の底を見たとき、大勢の友人から仕事の紹介や励ましの声に助け支えられました。

世の中には、助ける神様がおられるのだと感謝の気持ちで一杯だったそうです。

出会い

とみさんの看護婦人生の再来は、娘さんの出産に付き添った病院で、中川医師との出会いでした。

当時勤務医だった中川医師は、四十三年九月に開業、そこで、とみさんの看護婦長としての仕事が始まります。その時とみさん四十九才。

第二次ベビーブームが到来した頃は一つの病院で一日に七人～十人の出産がありました。看護婦さんも、助産婦さんも超過密なスケジュールを消化する毎日、とみさんもその一人でした。

毎日十人近い赤ちゃん誕生に仕事は二十四時間体制でした。夜中に起こされ病院へ走ることは日常茶飯事です。「この病院では自分が赤ちゃんを取り上げなければ、自分がいなければ」また、研修会等で病院を留守にする時には、家に電話しなくても病院へは様子を聞くために必ず電話をすることで安心したそうです。

「今日まで健康で働けたのは、病気する暇もない程仕事が忙しい病院だったから」と振り返られます。

一万人の産声

「鰕目婦長、あんたがおるからいつも安心して仕事ができる、婦長が元気な間、病院に来て欲しい」と病院長の篤い信頼を得ています。とみさんは、病院のスタッフや患者さんにも大切な存在です。

一万人以上の赤ちゃんを取り上げ「赤ちゃんの取り違いは、一度もなかった」また、「母と娘、親子二代の出産のお手伝いもあり、街の中で声をかけられるんですよ」と語られるとみさんの笑顔が印象的でした。

（お知らせ／10号の右上の写真で、吉田みのりさんは前列左端でした。）

高岡って甘いの？しょっぱいの？

年を重ねることはどんなこと？
誰もが迎える高齢化社会についてちょっぴり考えてみました。

私は今、八十一歳。三重県に住んでいます。長女が高岡に居ますので、毎年何度か御地に赴きます。高岡は不思議な所、万葉あり前田様の文化ありで、毎回楽しく過ごしています。知らぬ間に私も齢を重ね終いの時を考えるようになりました。願わくは万葉の里・高岡の長女の許で、その時を迎えたいと思っています。

素敵なお話やね。富山県は共稼ぎ率も高いし、女性のパワーが何かと話題になるけど現状は違ってるような気がするわ。高岡って若者が少ない街のような気がしない？県外に進学し、そのまま就職してなかなか帰って来られないのかしら。

最近の不況にリストラされ、職業安定所の中でも、中高年の姿が目立っているようだし、弱い立場である女性や高齢者を活かせる職場が少ないのが現状のようですね。

私は何もできないと思っていたけど、シルバーに登録し、留守番や家事の手伝いをする事で人の役に立ち、その上ある程度の報酬も得られ、こんな楽しい事はないですよ。家族だけでなく社会の役に立てるのだと思うと毎日が生き生きしています。

ある所のシルバー人材の話も聞いたけど、平均年齢六十五歳のグループで漬け物の加工販売を始めたところ、大変人気を呼び利益が上がり、ついに法人化されたって。法人化するに当って利益と共に収入が増え、扶養家族から抜けなくてはならなくて家族の了解が必要になった話に、高齢者とは言え、元気な納税者で過ごせたらいいなって思いますよ。

子育てが終り、後は自分の人生を振り返ってのんびり過ごす人生も楽しいかも知れない。

しかし、老いに向かって自分なりの人生計画を経て、中高年パワーを発揮しながら、過ごす毎日も素晴らしよね。

おじいちゃん、おばあちゃんの役割でもなく、お父さんお母さんの役割でなく、夫と妻の役割でもない。自分自身の顔を持ち、自分の名前で呼ばれる事は決して楽な事ではない。楽なのは長い物に巻かれパターンの中で生きる事だ。個で生きるという事は、自分の目で物を見、自分の頭で考え、自分で選び、そして自分で責任を持つ。

下重暁子さん著書「不良老年のすすめ」より

年を重ねる事は素晴らしい事。ようやくできた、自分の時間をいかに過ごすか、意識し、考える事が大切です。

このページは、県外出身者(たびのひと)から見た高岡の印象を語っていただいています。

こんにちは 女性行政室です

平成14年度　女性行政室事業案内

高岡市男女平等推進プランの推進

条例制定　男女平等を推進する条例制定

6月29日㊏　条例について皆さんの意見を聴くための「市民フォーラム」を開催します。
（ところ／高岡市ふれあい福祉センター）男女共同参画週間中

各界各層別フォーラム

条例制定を視野に入れたプランの啓発
（企業、団体等を対象）

シンポジウム

10月19日㊏
ところ／富山県高岡文化ホール

- 市民の企画による「男女共同参画講座」
- プラン学習支援事業
  （男女共同参画に関する学習に講師等を派遣します。）
- プラン情報誌「ありーて」の発行
- 女性の弁護士による無料法律相談
- 書籍･資料の収集、閲覧
  ビデオの購入･貸出し　　他

編集後記

固定観念の強い私は、ものの見方考え方をちょっと違う角度から眺めてみたいと思い「ありーて」編集委員に仲間入りしました。だが、「男女共同参画」に薄学な私には耳慣れぬ言葉に戸惑いの毎日で一年が過ぎました。

編集の仲間たちと取材を重ね男女共同参画社会の生き方を語り合うと、世の中の不平等を感じて友人にその大切さを声にできるようになって二年目を迎えました。

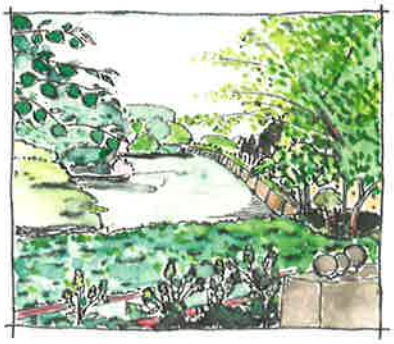
この二年間の収穫を忘れずに老いを楽しく暮らしたいと思います。　◆丸山　清美

朝のＴＶドラマの中で、男女共同参画社会の在り方について語らせている場面があり、面白く聞く。会話の中身をどれだけの人が理解しているだろうか、と知りたい気持ちになった。「ありーて」についても読み手の反応が気にかかる。シリーズの「セピア色の写真から」には、愛読者がおられると聞いた。私も4人の方を取材させていただいて、万福の感がある。それぞれに個性的であり、魅力的で素敵な方ばかりでした。戦前戦後と生き抜き、今日まで活躍しながら年齢を重ねてこられた。そして、今なおチャーミングな彼女たちに、私はすっかり憧れてしまいました。　◆原田由美子

ありーて編集員をして新しい友ができました。もう60歳になろうとしている私にです。これってすごいことだと思いませんか。

真の男女平等を目指す高岡市が市民参加でつくる啓発誌「ありーて」が縁で出会った仲間達です。一人ひとりが、何かきらりと光る素敵な力を持って集まりました。この11号ができれば、あの充実したディスカッションの日々や文章を紡ぐ作業は終了です。目的を持って「ありーて」をつくる二年間で感じ合える何かをお互いに見つけました。プライベートは知りません。でも、それぞれの持つ内なる力に魅せられ、これからも折あるごとに友としてつきあっていきたいと思います。　◆越野　誠子

身近でありながら、なかなか手の届かない男女平等って、いったい何？ありーて姫を見習いながら、2年間奮闘してきたつもりですが、夫の観念さえ変えられない現実にため息ひとつ、ふー。卒業は次のステップへのチケットと、しみじみ思う40代の春です。　◆山本　ゆみ



発行／高岡市企画調整部女性行政室
〒933-8601　高岡市広小路7-50
電話／ 0766-20-1262　FAX／0766-20-1661
MAIL／ gender@office.city.takaoka.toyama.jp